

片岡康子監修・編著 『日本の現代舞踊のパイオニア』 國吉 和子

本書は日本洋舞史黎明期の舞踊家から12名、それぞれの足跡をわかり易くまとめた一冊で、2015年3月に開催された「ダンス・アーカイヴ in JAPAN 2015」公演関連企画として発行・出版されたものである。出版の契機となった同公演【主催＝新国立劇場、制作＝新国立劇場、Dance Archives in Japan(略称DAiJ)企画運営委員会(代表:正田千鶴)、協力＝一般社団法人現代舞踊協会】は、前年2014年3月に行われた第一回に続くもので、いずれも大正、昭和初期に上演された名作が、現在活躍中の舞踊家によるキャストイングで復元上演されている。すでに100年の歴史を築いた日本の近代舞踊、その多様性と進取の気性に富んだ作品に幅広い世代の観客が注目した公演であった。

本書の監修は片岡康子、本体は序章と九章から構成され、八名の研究者が各章の舞踊家を分担執筆している。まずは序章として歌舞伎舞踊における近代化について児玉竜一、帝劇から浅草レビュー時代を杉山千鶴が解説し、近代舞踊誕生の背景を固めている。そして石井漢、石井みどり、片岡、小森敏を杉山、伊藤道郎を武石みどり、高田雅夫と高田せい子を日下四郎、江口隆哉と宮操子、執行正俊、岩村和雄を桑原和美、檜健次を田中いづみ、新村英一を細川江利子、と各々エキスパートが蓋著を傾け、貴重な図版資料を公開しながらわかり易く記している。これまで一般にあまり知られていなかった舞踊家の業績にもしっかりと光が当てられ、舞踊史に客観的に位置づけられている。

本文内容はさることながら、本書冒頭に付された「舞踊家メモ」には、本書掲載の舞踊家の生没年と渡航期間がグラフで一覧になっているので、欧米留学(遊学)の時期を一目で見比べることができる。1910年代から30年代にかけていかに多くの舞踊家が欧米に学んだことか。これまで日本の近代舞踊はドイツのノイエ・タンツの移入という面が強調されることが多かったが、同時期のアメリカのルース・セント・デニスからの影響も重要な要素として再確認されるのである。また、各章の冒頭一頁には各舞踊家の略年譜が掲載されていて、読者にとっては舞踊家相互の横のつながりを想像しつつ読めるし、[引用文献・資料]一覧も、研究者にはたいへんありがたい。

なによりも舞台芸術が生きた形で蘇る場は劇場である。舞踊はアニメイトされて初めて命が宿る

のである。テキストと復元上演とが密接に連携してこそ、舞踊のアーカイブといえるのではないだろうか。石井の諸作品の復元、江口の「日本の太鼓」で幕を開けたDAiJ復元上演公演では、これまでもコミカルに命を吹き込まれた「スカラ座のまり使い」、伊藤、小森、宮という三者の同名の作品を比較上演した「タンゴ」、伊藤の「ピチカット」、執行の「恐怖の踊り」や檜の「釣り人」等々、タイトルしか知ることができなかった諸作品が復元された。本書では、DAiJ企画で復元上演された舞踊家を中心に取り上げられているが、今後は近代バレエやスペイン舞踊界におけるパイオニアにも触れる機会が訪れることを期待したい。

最後に、本書は驚くほど安価なので、学生のためのテキストとしても最適である。まさに初心者から専門家まで携帯してほしい一冊である。今後、日本の近代舞踊に対する関心が高まり、研究者が輩出されることを期待したい。そのためにも復元の作業を通して、新たな資料の発見を促すことが大切だろう。このような作業を継続してこそ、はじめて私達の時代、現代の舞踊に通じる共感と真の理解が生まれるのだと思う。

(新国立劇場情報センター、2015年3月刊)

公益社団法人日本照明家協会編 『日本舞踊の照明』

吹田 響子

日本舞踊は、近代の照明の発達とともに新しい作品が創られ、照明技術をとりにいながら芸術的な価値を高めてきたといえる。今日では、舞台芸術として日本舞踊は照明だけではなく美術・音楽・衣裳ほかの周縁の美が大きな要素となっている。今回、照明家の要望から日本舞踊の照明に焦点をあてた書が発行された。それは、日本舞踊に携わる実演家は元より日本舞踊の研究者にとっても、伝統的な舞踊と照明というテクノロジーとの関係を改めて喚起させる手引き書としても重要なものであり、以下の通り紹介する。

DESIGN SERIES VOL. 1『日本舞踊の照明』
公益社団法人日本照明家協会発行、2015年12月10日、215頁

本書の内容は大きく二つに分かれる。主眼となるのは公共施設等で照明に携わる人々から日本舞踊の照明データを求める声を受けて『日本照明家協会雑誌』に長年連載された「日本舞踊の照明」を再構成した「『日本舞踊の照明』について」(38

～210頁)であるが、本書の前半部分(6～37頁)には専門領域の研究者等による日本舞踊の理解を深めるための多面的な視野による論考が掲載されている(丸茂祐佳「日本舞踊の美」、古井戸秀夫「日本舞踊略史」、神山彰「近代の日本舞踊とテクノロジー」、北寄崎嵩「日本舞踊照明攷」、城後一朗「日本舞踊の流派」、小林直弥「日本舞踊の種類」他収載)。

主眼の『『日本舞踊の照明』について』は編集長である舞台照明家の北寄崎氏が渾身の力を発揮した成果であり、53曲を収載している。本稿では、その中から照明変化を伴う舞踊作品をいくつか例にあげ、時代とともに発展してきた調光装置とそれによる色彩の充実でいかに視覚的に多彩な演出効果が得られるようになってきたかを探る。

長唄「鷺娘」(99～102頁)

初演は、古井戸氏によると、竹田カラクリの趣向をまねて舞台に大きな灯笼が出てその中から踊り手が登場するという演出であった(『新版 舞踊手帖』128～129頁)。宝暦の初演当時の全蓋式の劇場から察するに「明かり取りの窓」からの外光で演じられ、照明変化は伴っていないと推測される。その後、明治期に九代目市川団十郎が復活上演して以来、引き抜きなどの演出が加えられた。

本書には作品ごとにキューシートが付けられており、それによると現行の照明は引き抜きと同時にフォロースポットライトが生明かりに変わり、サスペンションライト等の照明がブルー明かりに加え、生明かりが100%の光量で点灯される。引き抜きなどの演出に合わせ照明も変化していったと思われる。

常磐津「お夏狂乱」(68～72頁)

坪内逍遙が作詞した「お夏狂乱」は、昭和3年時の帝国劇場の上演の際には「月までも晴れたり曇つたり(以下略)」(早稲田大学演劇博物館所蔵「昭和三年九月狂言 繪本筋書」と夜景の描写に加え月も描かれていた。現行は、「酔の醒め際」をきっかけに夕景の描写となる。サスペンションライトをはじめ生明かりが100%から40%へ抑えられ、アンバーが50%から100%へとなることで夕景を表現。さらにそこから夜の情景へとうつる。この夕日の照明のデザインについて北寄崎氏は「かなり写實的に、そして立體的に」(『日本舞踊を中心とした照明デザインのプロセス』『舞踊學』第23号、113～115頁)と述べており、照明変化によってお夏の心理描写を浮彫りにしているところに新しさがある。

清元「保名」(202～204頁)

初演は七変化の一つとして上演されたが、上演

は途絶え明治期に九代目団十郎が復活させ、大正11年六代目尾上菊五郎の演出が現在踏襲されている。新舞踊運動の影響を受けた六代目菊五郎の「保名」については神山氏が照明の発達と作品の関係性を明らかにされている(「『保名』という気分—「大正演劇」の一面—」『大正演劇研究』第5巻、23～32頁)。照明は遠山静雄氏が手掛けており、現行の照明はローアークライアントライトに葉の花畑をイメージさせる黄色を、アッパーホリゾントライトは青空のブルー系を使用し、ダークオープンのまま幕が開き「なすな恋」で照明がフェードインする。これについて本書で神山氏は「近代科学の象徴である電気照明と帝劇の調光技術が加わったもの」と述べている(10～11頁)。

このようにみると、理論的指導者や実演家や照明家が進取の精神をもって日本舞踊は近代と向き合ってきたことがわかる。よって、本書は日本舞踊の照明に関する貴重な資料であるとともに日本舞踊の近代について問い直す機会となる絶好の書といえよう。

序文には四世花柳壽輔氏が見事に日本舞踊と照明との関わりを述べておられ、「(日本舞踊の照明は)同じ曲目でも流派に依って全く異った設定を要求したり、(中略)中々定番を作成するのは至難の業」とある通り、照明デザインを決定することは難しく、本書の照明プランが「決してそれを縛るものではありません」という日本照明家協会会長の沢田祐二氏の言葉を心に留めたい。

(公益財団法人日本照明家協会、2015年12月刊)

遠藤保子・相原進・高橋京子編著 『無形文化財の伝承・記録・教育— アフリカの舞踊を事例として』

中村 美奈子

筆者が冒頭でも述べているように、本書は、これまでに公表してきた研究論文や雑誌論文などを表題にふさわしい形に整理し、加筆修正したものであり、7章構成になっている。前半の第1章は文献研究であり、続く第2章、第3章は、実験に基づく研究論文であり、以降は、実践研究の論文である。

第1章、舞踊研究の歴史と舞踊の記録・保存・伝承、では、アフリカの舞踊に関する研究の歴史を特に日本人による研究に焦点を当てて外観しており、また、舞踊がどのように記録・保存・伝承されてきたかについて、考察されている。第2章

ナイジェリアの舞踊と舞踊のデジタル記録・解析では、ナイジェリアの代表的な舞踊の内容について述べた後、それらをモーションキャプチャを用いてデジタル記録した舞踊動作の解析結果をもとに考察している。第3章 ガーナの舞踊と舞踊のデジタル記録・解析では、第2章と同様の手法をとり、肩と腰に着目して舞踊分析を行っており、ナイジェリアと同様にガーナにおいても肩と腰がそれぞれ異なったユニットとして扱われていることを実証的に指摘している。なお、第2章と異なる点は、第3章では、解析結果に関して、インフォーマントに現地で聞き取り調査を行い、解析結果と合わせて考察している点である。「この舞踊では腰を強調する。男性Aが腰の動きにメリハリがあるので上手い。男性Bは腰に持病を抱えているため、この時も腰がよくなかったのではないかと推察できる。」のような質的な情報が付加されることで、定量的なデータの分析を補完しており、文理融合型の研究といえるのではないかと思う。

第4章と第5章は、民族舞踊公演の招聘公演などの実践に基づく内容であり、民族舞踊の海外招聘公演などの国際文化交流を企画する際に参考となる情報が多く含まれている。第4章、日本におけるアフリカの舞踊<1>では、日本におけるアフリカ民族舞踊公演を概観し、エチオプス・アート日本委員会が企画・実践したアフリカの民族舞踊公演の目的と意義、劇場におけるアフリカの民族舞踊公演の内容が紹介されている。第5章、日本におけるアフリカの舞踊<2>では、その民族公演の事例として、ガーナの民族舞踊公演を詳細に検討している。第4章、第5章、ともに、公演準備から、公演演目などの資料、そして舞踊公演の評価まで含まれており、公演の実際がよく伝わってくる内容になっている。

第6章と第7章は、再びモーションキャプチャの技術の応用という側面を扱っている。第6章、スポーツ人類学と開発教育－モーションキャプチャを利用したアフリカの舞踊と教材－では、著者たちが制作したデジタル記録を利用したアフリカの舞踊の教材をもとに、スポーツ人類学研究を新たに展開する方法を提示している。指導計画にも言及しており、学校教育の現場でも活用できるように考えられている。また、教材は、マルチアングルで舞踊を再生できる点に特徴があり、外務省の平成20年度開発教育/国際理解コンクール(平成21年度よりグローバル教育コンクール、平成23年度よりJICA事業)において受賞している。第7章、アフリカの舞踊とグローバル教育に関する基礎的研究では、小学校高学年に対するグローバル教育を視野にいれた実践研究(日本学術振興会「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大

学の研究室へ～KAKENHI」採択事業「踊りってなんだろう?～アフリカの踊りを科学する」)が詳細に報告され、それを踏まえての考察である。補章、ガーナでの研究成果の公表は、研究成果の現地への還元と位置づけられよう。

著者らのアフリカの舞踊研究の様々なアプローチを知ることができるという点で興味深く、主に民族舞踊の研究者や学校教育関係者に参考となると思われる。

(文理閣, 2014年3月刊)